

国士舘大学スポーツ医科学科養護実習研究授業
レポート

「小学生を対象としたCPR教育」について

内容

1. はじめに

単元名と題材

教育実習研究授業実施日と対象者

教育実習研究授業テーマとその目的

2. 授業の構成

対象となる小学生の実態と授業の構成

指導要領

指導上の留意点

3. 授業の評価

児童への影響

実習校教員からの評価

自己評価

4. 今後の課題

学校教育における BLS 教育の現状

学校教育へ導入するにあたっての課題

5. まとめ

1. はじめに

1.1 単元名と題材

単元名：けがの防止

題 材：限りある命を守るために（救急手当て）

1.2 教育実習研究授業実施日と対象者

実施日：平成 19 年 5 月

対象者：小学校 5 年生 63 名（2 クラスに分けて実施）

1.3 教育実習研究授業テーマとその目的

小学生 5 年生を対象とした研究授業のテーマとして、心肺蘇生法（BLS）を選びました。

年々、中高生だけでなく小学生のいじめや自殺、犯罪などが増えてきています。このことは、当たり前であった命の尊さというものが現代の児童たちに欠けつつあることを示しています。教育現場でもこのことは問題視されており、教育委員会や各学校でも「命の教育」や「いじめ対策」などを行っています。しかし、児童たちにとっていじめは私たちが考えるよりもっと身近で、現実的な問題です。そのため、児童たちにとっていじめは直視し難い問題であるようです。そこでダイレクトにいじめに対する教育をするのではなく、別の観点からであれば児童たちも受け入れやすく、命の尊さを感じてくれるのではないかと考え今回のテーマを選びました。

今回の研究授業の目的は心肺蘇生法（BLS）の知識・技術の習得ではなく、それを体験することを通して、命に限りがあることを知り、命を大切にす気持ち、人を助ける思いやりの気持ちを育成することにあります。これを育成することができれば、先にあげたいじめなどの問題も減少するのではないかと考えます。

2. 授業の構成

2.1 対象となる小学生の実態と授業の構成

授業を構成する上で、対象となる児童の実態を知り、それにあった授業内容を構成することが求められると考えました。そのため、教育実習期間中に授業の見学や休み時間に児童たちと接するなど関わりを持つように心掛けました。

小学校で呼吸、循環など体のしくみは 6 年生で学習します。そのため、今回対象となった 5 年生はそれについては日常生活で得た知識のみで、個人差もありました。児童全体としては明るく活動的で発言力がありました。また、児童たちの体格は市内平均値よりも低いようで、全体的に少し小さい印象を受けました。

このことにより、話す時間は短く、体験させる時間を長く取りました。また、体格を考慮し、疲労で集中力が欠けないよう長い時間継続して体を動かすことの無いようにしました。そして発言力を活かしディスカッションを導入し、授業の進行も質疑応答形式を主体としました。

2.2 指導要領

(1) 目標

- (ア) 心肺蘇生法（BLS）に興味を持つ、体験する。
- (イ) 命に限りがあることを知り、命を大切にすゝる気持ちを持つ。
- (ウ) 人を助ける思いやりの気持ちを持つ。

(2) 内容

- (ア) 「命がリセットできるか」という質問を切り口にディスカッションをし、命についての考えを持つようにする。
 - ① 命には限りがあること。
 - ② 失った命は戻らないこと。
- (イ) 今、目の前で人が倒れたら自分には何ができるか考え、ディスカッションをし、自分にもできることがあるという考えを持つようにする。
 - ① 救急手当の方法に通報、人工呼吸、胸骨圧迫、AEDによる除細動などがあること。
 - ② 通報、胸骨圧迫など自分たちにもできる救急手当があること。
- (ウ) 人体の呼吸、循環の働きを知ることで、胸骨圧迫の効果についての考えを持つようにする。
 - ① 酸素が体の栄養分であること。
 - ② 呼吸で体に取り入れた酸素を心臓から送り出される血液によって全身に運んでいること。
 - ③ 呼吸をしていないということは致命的であるということ。
 - ④ 胸骨圧迫は生きるために大切な心臓と脳に血液を送っていること。
- (エ) 心肺蘇生法の必要性についての考えを持つようにする。
 - ① 心臓が止まった人を手当しなければ3分で2人に1人は死亡すること。
 - ② 救急車は到着するのに平均6分かかること。
 - ③ 上記のことによりそばにいる人の迅速な手当が必要なこと。
- (オ) 心肺蘇生法（BLS）の流れについての考えを持つようにする。
 - ① 倒れている人がいたら呼びかけること。
 - ② 呼びかけても反応が無ければ119番通報すること。
 - ③ 呼吸をしていない人がいたら胸骨圧迫をすること。
- (カ) 人形を使い胸骨圧迫を体験する。
 - ① 姿勢、位置、リズムなど正しい胸骨圧迫の方法を知ること。
 - ② 評価し合うことで、他者を見ることができるようになること。また、それをういコミュニケーションができるようになること。

2.3 指導上の留意点

- (ア) ディスカッション時は具体的な質問を投げかけるようにする。また意見が出ない場合は、具体例を挙げ、正誤で答えられる質問をし、円滑に進めること。
- (イ) 医学的な専門用語や難しい言葉は避け、やむを得ない場合は児童が理解しやすいようにすること。
- (ウ) 教材は絵を多くするなど理解しやすいようにすること。
- (エ) 胸骨圧迫を生体にふざけて行うことの危険性を理解させ安全管理を怠らないこと。
- (オ) 体格を考慮し、ミニアンは「Child」に設定する。「Adult」は最後に体験させるだけにとどめる。
- (カ) 技術を習得することが目的ではなく、命の尊さ、思いやりの気持ちの育成が目的であること。胸骨圧迫がうまくできない児童に対して、そのことを踏まえて指導すること。
- (キ) 授業の進行は質疑応答を用いた双方向性を主体とし、児童の興味を引くようにすること。
- (ク) 資料は全員で音読させたり、胸骨圧迫はメトロノームのリズムに合わせ同時に圧迫させるなど、全体を通して活動を同時に行うことで全体の統制を図るようにすること。
- (ケ) 評価をさせる際は、悪いところだけでなく良いところも評価するように指導すること。

3. 授業の評価

3.1 児童への影響

授業後に児童に対してアンケートを実施しました。項目と結果は以下の通りです。

① 興味が持てたか。(5段階評価) 回答者 57名

5(とても興味が持てた) : 21名

4(興味が持てた) : 22名

3(ふつう) : 10名

2(あまり興味が持てなかった) : 2名

1(興味が持てなかった) : 2名

② 印象に残ったか。(5段階評価) 回答者 57名

5(とても印象に残った) : 32名

4(印象に残った) : 14名

3(ふつう) : 10名

2(あまり印象に残らなかった) : 0名

1(印象に残らなかった) : 1名

③ 今目の前に人が倒れていたら何ができるか。(自由回答)

多くの児童が以下のように回答しました。

「119番通報する」

「大人を呼ぶ」

「呼吸が無ければ胸骨圧迫をする」

また、少数ではありますが「自信が無い」という回答もありました。

④ 授業の感想(自由回答)

以下のような意見がありました。

「胸骨圧迫は疲れた。大変だった。」

「Childは圧迫できたが、Adultは圧迫できなかった。」

「自分でも人を救うことができると感じた。」

「楽しかった。」

「できないと思っていたが、できるようになった。」

「もし、人が倒れていたら助けたいと思った。」

以上のような結果より、多くの児童に興味を持ってもらうことができましたが、全員を惹きつけることまでは達しませんでした。しかしながら、「自分でも人を救うことができると感じた。」「もし、人が倒れていたら助けたいと思った。」などの意見も得られ、この授業に期待する効果を実感することができました。

また、授業の前後で「目の前で倒れていたら自分には何ができるか。」という質問を投げかけました。授業前では「何もできない。」と答えた児童が半数程度いたのに対し、授業後ではそれが3名程度にまで減少しました。このことにより、この授業を通し児童に人を助ける思いやりの気持ちを持ってもらうことができ、授業の目的を達成することができたのではないかと考えます。

3.2 実習校教員からの評価

実習校ではご多忙の中時間を割いて、多くの教員の方々に研究授業を見ていただきました。また、研究授業後は協議会でも多くの意見をいただくことができました。

「1人1体人形があったところがよかった。」

「貴重な体験ができた。」

「教材もイラストを用いていたのがよかった。」

「胸骨圧迫をふざけて生体に行わないなど安全管理をしていたのがよかった。」

など良い評価もいただきましたが、

「胸骨圧迫など児童にとっては言葉が難しかった。」

「実技評価は児童には少し難しかった。」

という意見もいただき、課題が残りました。

3.3 自己評価

今回授業を行った2クラスはそれぞれ雰囲気や特徴は異なりますが、授業を行ってみて心肺蘇生法（BLS）の方法やAEDなどについて知っている児童が予想以上に多かった印象を受けました。AEDに関してはクラスに数名程度でしたが、児童たちはメディアや日常生活を通してこれらの知識は得ているようで、心肺蘇生法（BLS）の普及が進んでいることを実感しました。このことにより、5年生に対してでも心肺蘇生法（BLS）の授業は円滑に進めることができました。

指導上の課題としては、ふざけてしまう児童のコントロールを迅速に行えず、1人で30人全員をしっかりと見ることができなかったことです。そのため、技術ができなかった児童に対し全体を通して指導はしたものの、個別には対応できず本来の目的が技術の習得ではなく、思いやりの気持ちの育成にあることを伝え切れなかったと感じました。

しかしながら、多くの児童に限りある命の大切さ、人を助ける思いやりの気持ちを持ってもらうことができ、この授業の児童に与える効果を実感することもできました。より多くの児童にこのことを感じてもらうためには、1度きりの授業ではなく、継続した指導が必要だと考えます。

4. 今後の課題

4.1 小学校教育における心肺蘇生法（BLS）教育の現状

今回の授業を通して心肺蘇生法（BLS）による命の教育は、児童に命について抵抗無く学ぶことができる教育方法だと実感しました。より多くの児童に心肺蘇生法（BLS）を通し、限りある命の尊さを感じてほしいと考えますが、現在の小学校教育では指導要領に無いため行うことができないそうです。指導者である教員も心肺蘇生法（BLS）の教育効果の大きさを感じる反面、それについての十分な知識がなく指導できないと感じているようです。

4.2 小学校教育に導入するにあたっての課題

専門家などによる指導により、学校教育の中に組み込んでいくことは近い将来可能なのかもしれません。しかし、児童のことを最も理解し、日常生活でも継続的に指導ができるのは、児童の身近な存在である教員です。心肺蘇生法（BLS）はふざけて行えば危険な行為です。児童の特性をつかみ、このことを児童により確実に理解させることができるのは教員です。技術の習得という観点から見れば心肺蘇生法（BLS）は児童には困難で、必要の無い教育のように感じます。しかし、命の教育という観点から捉え、小学校教育に取り入れれば児童に対する教育効果が得られるだけでなく、教員がその知識・技術を習得することで学校全体の危機管理のレベルも高くなります。

このことから、教員が心肺蘇生法（BLS）に関し指導できる知識・技術を習得し、それをを用いて児童に命の教育ができるようになればと考えます。

5. まとめ

今日の児童生徒たちに限りある命の尊さについての考えが欠けつつあることは非常に残念なことです。しかし、児童たちはそれを失ったわけではありません。それが失われる前に、早い段階から児童たちが受け入れやすい命の教育をすることが必要だと考えます。心肺蘇生法（BLS）は救命手当としてだけでなく、命の教育という面から見れば大きな効果が得られます。心肺蘇生法（BLS）が小学校教育に導入されれば、今より1人でも多くの命を救えると今回の授業を通して確信しました。

今回の研究授業に際し、実習校の方々には多くのご協力をいただきましたことを心から感謝いたします。